

出会い（4）

—若き日の挑み—

奥村 一郎



青年会

前に本誌に書かせていただいたことだが、学徒出陣にいたるまでの若き学生時代における不幸な聖書との出会いは、終戦後の復員、復学に続く東大時代において、思いもかけなかった一つの機会から、またさらなるキリスト教との激突を引き起こすことになった。

当時在籍していた法学部政治学科に通うために上京したのは、戦後まもなくの秋十月の頃だった。東大学舎の大半は幸いに爆撃の被害を免れて残っていたが、授業が正常化するまでには、なおほど遠い混乱の状況であった。それに、まだ焼野原そのものであった街の中に下宿を見つけることも容易ではなかった。たまたま、高円寺の一角に、お寺とともに運よく焼け残った家が数軒あり、そこにあった、一高・東大時代の同級生のところに下宿させてもらうことができた。しかし、日本中どこも、貧困のドン底にあった時だけに、落ちていて勉学のできる環境ではおよそなかった。そんななかで、町会長がわれわれ学生に青年会をつくるようにと呼びかけられた。それほど広い地域ではなかったが、思いがけぬほど多くの学生が集まってきた。男女合わせて40人以上だった。おたがいに初めての面識なので、話がすぐにまとまるのは難しかったが、とにかく発足に漕ぎつけた。まず大切なのは、子供会ということ、つぎに、読書会、詩や俳句、和歌の会、映画鑑賞会、それに、貧しいながらも、テニスやバレーボールといったスポーツなど・・・それぞれ、受け持ちを決めていった。ところで、当時の米軍司令官マッカーサー元帥がクリスチャンであり、その折々の演説の影響もあったのか、あるいは、カトリックもプロテスタントも、その他のキリスト教派も一斉に日本全国にわたって再宣教を競ってはじめたためか、「バイブル・クラス」を作ろうという提案がでてきた。ところで、困ったことに、青年会のなかには、その世話役をひきうけるものが一人もいなかった。青年会の会長と、そのときの議長であった私は、かつての、にがい思い出ししかない聖書を読むことなどは真っ平だった。しばらく、皆が黙ってしまった。すると、一人の青年が手を上げ、私に向かって、「おまえ、坊主のような顔をしてるから、おまえやれ！」と大声でいった。一瞬、たじろいだ。「坊主のような顔」といわれたのも、心外だった。それに、彼自身が寺の息子ということが分かり、大笑い。そのまま、気の進まぬ私に役がきまってしまった。

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

一人になっても・・・

引き受けたからには、やらねばならない。はたと困ってしまった。大の聖書嫌いの私である。聖書研究会の世話役などできない。良心的にもゆるされない。そこで、町会長を通じて、そばにあったカトリック教会に紹介してもらうことにした。そのとき、今江先生という大変熱心なカトリックの老婦人に間に入って話をつけてもらい、初めてカトリックの修道院を訪ねた。吉祥寺駅から北に15分ほど歩いたところにある「アルベルト・ホーム」という男子修道院である。連絡もすでについていたのか、すぐに出てこられたのが小柄なドイツ人宣教師ナーベルフェルト師であった。髪の毛がなかったので、老けて見えたが、おだやかな、温かい愛につつまれた好々爺の感じだった。

用件を伝えと、すぐに尋ねられた。

「何人ぐらい集まりますか？」

「たぶん、15名ぐらいは来ると思いますが・・・」と自信のない返事をした覚え。

「そこで、一つ条件があります」と切り込んでこられた。

「なんでしょう」というと、しっかりした口振りで「あなた一人になっても続けますか」と問われた。一瞬はっとしたが、答えは一つしかない。「やめます」などと意地でもいえない。

「はい、続けます」と答えた。「では、行きましょう」と言うことで決まり、毎週来てもらうことになった。

このひとときが、やがて私の生涯の方向を逆転させてしまうとは夢にも思わなかった。

聖書研究会

とにかく、責任上、聖書に一応目を通しておかなければと、前日までに、新約聖書だけでもと、猛スピードで一気呵成に読み通

した。翌日は、教会の主任司祭であった野口師（後、広島司教）にも大歓迎してもらい、当時米軍から払い下げのカマボコ兵舎の司祭館で集まることになった。参加者は予測を越えて盛会、数人の修道女の姿が見られた。多分近くのメルセス会のシスターであったかもしれない。講義はよく知られた、マタイ福音書5章の「山上の垂訓」の箇所であった。話が終わると、いつものように質疑応答に入ったが、だれも質問をしないので、司会者の私がする羽目になった。話題はなんでもよいということであったので、前から気になっていた奇跡のことを尋ねた。返ってきたのはきわめて正統な公式的解答。

「キリストは神でしたから、病気や罪で苦しんでいる人々を癒したり、飢えている人に食べ物を与えて、ご自分が愛と慈しみの救い主の神であることを示すために、そうした沢山の奇跡をなさいました」

そこで、若気の至り、ムラムラとなって私は猛然と反論した。

「こんなに科学が進んだ現代社会にあって、そんな馬鹿げた作り話を信ずる人がいるということの方がよっぽど奇跡ですよ・・・」

それからの議論は全くの平行線。両者とも一歩も譲らず、固い雰囲気になってしまった。参加者の多くが蹊いたのか、次の会では、ぐっと減り、5人前後になってしまった。さらに、会をかさねる度に少なくなって、やがて2、3人の近い友達だけ。それも、時々、用事があったりして欠席。ついに、一人になってしまうこともあった。しかし、男の約束、「ひとりになっても続けること」。しかし司祭館の部屋も借りにくくなって、戦災で壊されたままの聖堂の暗い片隅で二人だけの勉強になったこともあった。そこで、場所を吉祥寺の修道院に移すことになった。それからは、参加者の顔ぶれが変わり、幾人かの東大生や東京女子大の学生など、その他の青年をまじえて勉強会は活発になっていった。私はますます気炎をあげて、「キリストは偉大な宗教家であったとしても神ではありえない。その奇跡は教祖を神話化する民間伝説にすぎない」といつも懸命に主張していた。しかし、不思議なことに、ナーベルフェルト師は一度も集まりに参加されず私にまかせきりであった。

（続く）

（参照）Vitalité Spring 1997 vol.23

フォト・ギャラリー・インターナショナル

Sally Mann

サリー・マン 作品展
「家族のスケッチ」
1997年11月19日 ㊥～
1998年1月30日 ㊤
*12月20日 ㊥～1月5日 ㊥ 冬季休館

石元泰博

Yasuhiro Ishimoto 作品展
「水と人のながれ」
1998年2月5日 ㊥～
3月20日 ㊤

フォト・ギャラリー・インターナショナル
東京都港区虎ノ門2-5-18 〒105
Tel 03 3501 9123

㊥～㊤ 11:00am ～ 7:00pm
㊥・㊥・㊥ 休館

P.G.I. 芝浦



Wynn Bullock

Child in Forest, 1951

Wynn Bullock

ウィン・バルロック 作品展
1998年1月6日 ㊥～
2月27日 ㊤

P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦4-12-32 〒108
Tel 03 3455 7827

㊥～㊤ 11:00 am ～ 6:00 pm
第2、第4、㊥・㊥・㊥ 休館

